

【親切を尽くすクリスチャンの生き方】



聖書本文：サムエル記第二章1-7節/暗唱聖句：エペソ人への手紙4章32節

説教者：鄭南哲牧師

(Rev.Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！一週間もみんなお元気でしたか。一昨日金曜日から愛知県も4回目の緊急事態宣言の対象地域に入りました。8月24日に、東京ではパラリンピックが開幕しましたが、お盆休み期間中の感染がさらに加えられ、自宅療養者が急増しています。愛知県も毎日感染過去最多を記録しながら、2000人を超えちゃって、なかなか下がる気味が見えていません。もういつ、とどこで感染されてもおかしくないような状況になっているような気がします。願わくは、はじまる9月中にもここまで守られて来られた愛する教会信仰の家族のみなさんお一人お一人を心身共に主がこれからも見守り、助けて下さいますように切にお祈り申し上げます。特に、こんな状況の中、今週から再開する子どもたちや学生たちの2学期の全学校生活の安全と神の祝福をも切にお祈り致します。

＜1.親切はみんなが願い、求めているもの＞

また4度目の緊急事態に入り、さらに自宅で家族の時間が増えると思われれます。最近夫婦、家族、他の方々との間の関係はいかがでしょう。最近夫婦の間、家族の間、関わった人々の間で、ささやかな夫婦けんかしたり、言い争ったり、寂しい思いをさせたりしたことはなかったでしょうか。人々はほかの人からしてもらいたいことはけっして大したことではないと思います。意外とみんなが近くにいる人たちや家族に望んでいることはささやかな、素朴な願いであることが分かります。夫婦の間で、家族の間で、他の人との人間関係の間で、教会の家族の間で、もうちょっと笑顔で、もうちょっと言葉に気をつけて優しい言葉で話しかけてほしい、もうちょっと冷たい視線ではなく、やさしい目つきで見たい！自身がいろんな面において足りないし、あやまちがあるけれど、その時も自分の足りなさや間違いに、もうちょっと大目に見て温かく励ましてくれたらと、今よりもうちょっと思いやりのある言葉や行動を見せてほしい！我らが愛する人々や関わっているすべての人々に対してそのような大したことではない些細な親切さを求め、望んでいるではありませんか。

親切ってというイメージは“いらっしやいませー！”挨拶する店員の姿で、他の人に親切にすれば良いけど、別にそうしなくても何の問題にならないだろうと思われるかも知れません。しかし、聖書が教えて下さる親切というのは、表ぐらいのものじゃありません。もっと深い意味があり、みなさんとわたくしもこの親切によって、今生かされ、生けるようになったかも知れないほど、人に欠かせないものなのです。聖書ではキリストを信じ、聖霊に従って生きる者たちに必ず結ばれ、見られるものであり、神に喜ばれ、人を喜ばせ、人に力づけさせるものとして、親切を尽くすように命じられています。

エペソ人への手紙4章32節には、「お互いに親切にし、優しい心で赦し合いなさい。神も、キリストにおいてあなたがたを赦してくださったのです。」 旧約聖書の箴言16章24節「親切なことばは蜂蜜(はちみつ)、たましいに甘く、骨を健(すこ)やかにする。」、コリント人への手紙第一13章4節「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。」、ペテロの手紙第一4章9節「つぶやかないで、互いに(親切に)もてなし合いなさい。」、コロサイ人への手紙4章6節「あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味の効(き)いたものであるようにしなさい。そうすれば、一人ひとりにどのように答えたらよいか分かります。」

＜2.親切(慈しみ、慈愛)の意味＞

それでは聖書が教えて下さる親切という原語の言葉には二つの原語があります。一つは、旧約聖書の中へブル語で「ヘッセード」という言葉で、同じ意味で「慈しみ(慈愛)」という言葉の意味があります。(本文1、7節参考)この慈しみや慈愛という意味を持っているへブル語の「ヘッセード」は「アガペ(無条件的な)の愛」とも似ています。親切を意味しているこのヘッセードという単語は旧約だけで約250回以上も使われています。ヘッセードは神様の変わらない愛を意味します。ヘッセードに含まれている意味は、相手のがのろいを受けるべき対象なのにもかかわらず、相手を哀れんで呪う変わり、いつくしみ深く(親切)施してあげる

姿勢、これがまさに親切であります。

キリストを信じている全ての人々は、一人も例外なく、すでに神の大きな愛の親切、溢れる神の(ヘセード)慈しみと慈愛を受け、全ての罪が赦され、救われた我らではありませんか。そして、今もなお、我々は変わらない神の愛の親切、神の慈しみ深い親切を日々受けている者が幸いな我ら、キリスト者たち、クリスチャンたちではありませんか！

テスの手紙3章4節-5節「しかし、私たちの救い主である神のいつくしみと人に対する愛とが現われたとき、神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による再生と刷新(さっしん)の洗いをもって、私たちを救ってくださいました。」

そして、もう一つは新約のギリシャ語の原語の聖書では聖霊の実の一つであり、親切の単語が「**クリストテス**」が使われています。英語の聖書では **kindness** 訳されているこの**親切**は**慈しみ**と同じ意味で使われています。**慈しみ、つまり親切は自分中心ではなく他人中心にまず考え、配慮する行動を意味します。親切と慈しみは、いつも相手を尊重するため、やさしい言葉遣いや、寛容の姿勢で接する事**です。**しかし、表だけの慈愛と親切でなく、まことの慈愛と親切は愛によって、愛の動機によって自然に表され、伴われるものです。**

<クリストテス(christotes)とクリストス(キリスト Christ)>

‘親切’、‘慈愛’ という単語はギリシャ語で‘**クリストテス**’ だとは申しました。しかしみなさん！クリストテス！よく話して見て下さい。ある単語と似てませんか。クリストテス、クリストテス！そうです。この単語は‘キリスト’を意味しているギリシャ語‘**クリストス**’という単語と発音も似ていたため、初代教会の人々にまぎらわしい単語だったそうです。そういうわけで信じなかった人々でもクリスチャンのイメージをいつも**キリストのように変わらない親切で、慈愛のある人々だと認められた**そうです。初代教会の当時キリストを信じ、キリストを信じ従う人々だったのにもかかわらず、親切ではなかった人々には“あなたはクリスチャンなのにどうして優しくないのですか。?”とよく言われたそうです。

今日みなさんはイエスキリストを信じるクリスチャンとして、周りから親切な人だと、哀れみ深い人、慈しみ深い人だと言われていますか。世界どこに行っても日本の人はよく親切だと言われます。しかし、だれかが自分に少しも邪魔させたり、被害をあたえると、顔色が変わり、つめたく、厳しく、攻める人になるわけではありませんか。

人間の親切は自己中の親切ですが、神からのヘセードの親切、クリストテスの親切は、変わらない神の愛と慈しみからの変わらない親切であります。

神の慈愛、慈しみの親切！は、我らの意志や努力だけでは決して出来ないものです。神の御助けがなければ、神の愛と恵みがなければなりません！なので、御霊の実の中で5つ目実が親切であると言われています。この神の親切の実が結ばれると、家庭に愛が溢れます。すべての人間関係が回復され守られます。

ガラテヤ人への手紙5章22節—23節「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません。」

<3.今日の御言葉の本文:どうすれば親切と慈愛をつねに実践する者になれるでしょうか。>

それでは私たちがどうすれば、私たちの人格と生活において、関わるすべての人々にまことの愛の親切、慈しみの親切を実践することが出来るでしょうか。今日はまさにこの慈しみ深い生涯をおくったイスラエルの王ダビデを通してともに学びたいと願います。

今日の御言葉のサムエル記第二1章—10章までは、やっとダビデ自分を殺そうとしていたサウルの王がなくなり、ダビデがイスラエルの王になってイスラエルを支配している背景です。ところが、ダビデは王になってから、すぐサウル家の残りの人たちを探していたことが分かります。事実、ダビデとサウル王は敵の関係でした。サウル王はずっとダビデに対するねたみとやきもちに捕らわれ、絶えずダビデを殺すために一生涯を追いつきながら、苦しめた敵の存在でした。

サウル王の死後、やっとイスラエルの王座を座るようになったダビデでしたが、ある日ダビデはそのサウル王の孫であり、ヨナタンの子供であるメフィボシエテがまだ生き残っていることを聞いて、メフィボシエテを連れ来させようと命じます。なぜでしょうか。

最後に残されているサウルの孫メフィボシェテまで完全に殺し、自分の王位を強くするためだったのでしょうか。

イスラエルの当時は、王朝(おうちょう)が変わると、以前の王家を滅ぼすようにさせることが当時の慣習でした。なぜなら、新しく立てられた王に反逆や陰謀が起こらないようにさせるためでした。特に、敵対関係だったサウル王が死んで、その反対側の新しい存在が王位についたら、敵対関係の人々を完全に滅ぼさせないといつか反逆する火種を残してしまうことはなおさらのことでしょう。そういうわけで、きっとサウル王の孫メフィボシェテもダビデが自分を探していることを聞いた時は“もう私は終わりだ。もう殺されるだろう。”と恐れていたはずで。

ところが、今日の**本文1節**はこうやって始まります。「**ダビデが言った。「サウルの子で、まだ生き残っている人はいないか。私はヨナタンのゆえに、その人に真実(実は、親切 kindness)を尽くしたい。」**」似たような表現が**7節**にも出ています。ダビデがメフィボシェテに会って、言った言葉ですが、ここでまたダビデのやさしさが見えます。「**恐れることはない。私はあなたの父ヨナタンのゆえに、あなたに恵み(親切 kindness)を施そう。**」ダビデは彼を心から受け入れてくれました。そして、彼にサウル王の地所(じしよ)の全部を返し、ダビデ王と一緒に住める特権をも与えました。「**いったい、何がダビデ王をあんなにやさしく慈しみ深く親切を施す事ができたのでしょうか。**」

＜①今まで受けた変わらない神の愛と恵みの親切さを忘れず、当たり前前にも思わなかった為＞

私たちが慈しみ深い人、つまりやさして親切を尽くす人になるためには、「**今までの愛と恵みを当たり前だと思わない姿勢、愛の負い目を保つ必要があります。**」

ダビデ自身は、今までの神様の慈しみと哀れみ、愛する人々からの愛の支えと助けのゆえに、自分の人生が守られ、赦され、今のすべてが与えられたことを忘れていませんでした。後ダビデ王によって記録された**詩篇51篇1節**をどなたか読んでくれますか。「**神よ。私をあわれんでください。あなたの恵みにしたがって(よって)。私の背きをぬぐい去ってください。あなたの豊かなあわれみによって。**」**慈愛の神様、憐れみ深い神の哀れみのゆえに**、今まで自分の罪が赦され、様々な危険や人生の危機から救われ守られて来たことをダビデ王は忘れず、当たり前前にも思わなかったのです。ダビデは今の自分の成功とすべてが、決して自分の能力と努力ではない事を覚え、知っていました。

「**サムエル記第二7章18-19節**でダビデの感謝の祈りの中でもそれを十分見ることができます。「**ダビデ王は言って主の前に出て、座して言った。「神、主よ、私は何者でしょうか。私の家がいったい何なのでしょう。あなたが私をここまで導いて下さったとは。19神、主よ。このことがなお、あなたの御目(おんめ)には小さなことでしたのに、あなたはこのしもべの家にも、はるか先のことまで教えてくださいました。神、主よ、これが人に対するみおしえなのでしょうか。」**」

いつも、神様からの恵みとあわれみによって、ここまで守られ導かれた恵みの人生である事を忘れませんでした。そういうわけで、いつもダビデはまず自分がその神様の慈しみと哀れみのやさしさ、親切ばかり頂いた者だったから、自分を絶えず殺そうとするのに、はまっていたサウル王がなくなった話を聞いた時さえも、一切嬉しく思わず、むしろサウルのため激しく悲しく泣き、そのサウル王家の人の中で残されている一人まで探し、愛と憐れみの親切を残るところなく全て施すことが出来たのです！

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！今までも、今年もここまで我々が守られ来たのはすべて我々の努力や能力ではなく、今まで我々が偉いからだったのでもなく、ただひたすら慈しみ深い神の憐れみの親切、御恵みの親切さのゆえであることを認めているのでしょうか。変わらない神の愛の親切のゆえに、赦された人生を頂いたわけなのです！今年ももう半年が過ぎました。今までも、これからも神から頂いた慈しみと恵み、その愛のおいめを忘れないようにしましょう。変わらない神の慈愛の負い目を決して当たり前前だと思わない人々は、また、自分の周りの人々に、もっとその愛の親切を、あわれむ心をもって人と接する事ができると信じます。

＜②今まで自分が受けた人の愛の親切も忘れなかった！＞

ダビデは、神の変わらない愛の親切だけではなく、自分が今まで受けた人々からの愛の親切を一生忘れなかったのです。「**人はよく自分が大変な時にもらった助け、愛は忘れないと言いながらも、時間が立つと、その時の愛の助けと温かい親切をすぐ忘れてしまったり、いやむしろ、今まで色々足りなかったところ、欠けていたところ、傷つけられたところばかりを大きく覚える傾**」

向があります。ダビデが王になった時、力と権力を手に入れた時、サウル王家族に対する復讐心や仕返ししようとする心よりも、サウルの息子だったヨナタンが王子の立場であったのにも関わらず、羊飼いの出身で何もなかったダビデに親切を尽くし、助け支えてくれたそのヨナタンの愛の親切のおいめを忘れず、ずっと覚えていたのです。今、ダビデ王自身がここまで、来れて、今のようになったのは、神の愛の親切だけではなく、ヨナタンから受けた愛の親切、優しく接してくれた支えと助けのおかげであることを、その負い目を忘れませんでした。そういうわけで敵の子孫で、障害を持って何の力もないメフィボシエテを探し出し、自分が出来るすべてを持って憐れみ、やさしく愛の親切を施し、尽くすことができたのです。

人は、子どもの時には、多くの親の愛のやさしさ、助けの親切を頂いのにも関わらず、大人になると、それは当たり前で忘れ、受けた傷や欠けた愛ばかりしか覚えられない場合があります。恋愛や新婚の時のやさしさや愛の親切だけ覚えて、結婚生活中にその親切や助けを当たり前だと思い込んで、大切に覚えてない場合があります。もちろん、人は神のような完全な存在でも、変わらない愛を絶えず表し、与える存在でもありませんが、今までご自身の人生がここまで守られ、与えられ、今になったのは自分をここまで大切に愛で支え、愛の親切を表しながら助けられたことを忘れず、愛の負い目の心を持っている時こそ、ダビデのようにまた他の人にも愛の親切を尽くすことが出来るでしょう。

イギリスのジョンドンという詩人はこう言いました。“私たち人間は個別の島ではなく、大陸の一部として生きています。”つまり人は一人で生きることができず、互いに助け合い支え合う関係の中で生きている存在という事です。自分は別に多くの人から助けられて来てないと思うかも知れませんが、実は私たちはたくさんの人々から愛の助けと愛のおいめを受けて来たのです。

一度、深く考えて見てください。今までどれだけおおくの人々に愛の助けや親切を受けて来たのかを。自身のために、誰かにたくさん愛を受けて来たことを当たり前と思わず、忘れない時こそ、また自分たちもだれかに返す心と行いが出来ると信じます。ダビデ王はこのような神様へ愛の負い目、回りの人々への愛の負い目を忘れず、覚えていたから、自分のそのように、また他の人に愛の憐れみを施すことが出来たのです。

③真の愛の親切さ:神の家族としての関係を保ち、接する事

愛する信仰の家族のみなさん！当時のメフィボシエテはサウル王の孫ですので、考えてみれば、ダビデを将来脅かす事が出来る相手の存在だったと考えられます。メフィボシエテを生かしておく、彼中心に周りの人々が力を合わせて、ダビデ王位を奪おうとする可能性はあります。しかし、驚くのは、ダビデはメフィボシエテを敵の息子としてではなく、却って自分の息子の扱いをします。私はこのダビデの姿を通して実際神様が私たちにに対して扱っている事と一緒にと思いました。

メフィボシエテは以前王子身分でしたが、今は反逆者であって人々の目を避けて逃げ回る立場になって‘ロ・デバル’つまり、この意味は荒野の地で住んで生きて来たかわいそうな人でした。サムエル記第二九章三節によると彼は足の不自由な人だったと書かれています。彼はほかの人のたすけがなくて、自分一人で生きることすらできなかったかも知れません。そんな彼にダビデは先に温かく話しかけながら、愛と赦しの親切の手を差し伸べます。まるで、神様が私たちに先に来られなされたのと同じようにです。今日の本文6節です“メフィボシエテ”実際メフィボシエテの名前の意味は“恥ずかしい者”でした。荒野の地で捨てられたまま住んでいた恥ずかしいと思って来た彼を、ダビデは神様のように親切に恵みを施しています。7節です。「ダビデは言った。『恐れることはない。私は、あなたの父ヨナタンのゆえに、あなたに恵みを施そう。あなたの祖父サウルの地所をすべてあなたに返そう。あなたはいつも私の食卓で食事をすることになる。』

ダビデはメフィボシエテのすべての身分と財産をサウル王の時と同じように回復させ、それだけではなく、これから王の食卓で、王と一緒に交われる特権を与えました。ダビデの慈愛と親切は決して一回用ではありませんでした。“あなたはいつも私の食卓で食事をしてよい。”ダビデの慈愛と親切さはいつまでも!でした。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！当時特別に王の食卓と一緒に食事ができる人はだれですか。同じ王の家族ではなければ、考えられないでしょう。ここでもダビデのやさしさが出ていますが、ダビデはいつか助けられた友達の息子だからではなく、メフィボシエテをかわいそうに思ったからでもなく、「家族」としてすでに自分の息子として受け止めていた

ことが分かります。 11節にもメフィボシェテは王の息子たちの一人のようにされたと書かれています。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！今日の箇所を通してダビデから神様と、イエスキリストと似たような姿が見えませんか。ダビデはただ人間的に同情してメフィボシェテに接したのではありません。神様が私たちに接しておられるように恵みを施しました。ここにでているメフィボシェテはまさに罪人であった私たちの姿を反映しているようではありませんか。みなさんもダビデのようにいつも親切な人、慈しみ深い人になりたいですか。そしたら神の家族の信仰と愛を持ってください。家族だから、喧嘩したり、言い争ったり、親切に出来なかつたりすることもあります。よくよく考えてみると、家族ほど、よく我慢し、言わなくてもやさしく接したり、また忍耐深く愛し合う関係ではありませんか。**自分の兄弟、姉妹だと思い、自分の家族として思えば、他人関係として一回用で表した表の親切から、私たちの態度と心の深さが変わり、より深い愛の親切、憐れむ親切、慈しみ深い親切、寛容な親切を常に保ち、あらわすことが出来るのではありませんか。**

愛するみなさん！私たちは教会内で口先では兄弟、姉妹、家族の言い方をよくします。きっとクリスチャンほど兄弟、姉妹、家族という言葉をよく使うところも少ないと思います。“神を父と呼ぶ我らの兄弟姉妹である”という神の家族への信仰と愛を保っていれば、前よりもっとやさしく親切な姿と生き方で生きれると信じます。イエス様ははっきりと私たちに言われています。神様の御前でまことの家族は神様の御言葉を聞き従う信仰の人たちなら、一緒に兄弟姉妹であり、神の家族だと言われました。(マタイ12:46—50、マルコ3:31-35、ルカ8:19-21、ヨハネ19:25-27)。コロナ禍で、我々の教会の信仰の家族みんなが、神の家族として、共に愛の親切を表しながら、かえり見て祈り合い、励まし合い、支え合って歩みたいと願っております。

お互いに最高の笑顔と親切さをもってこう感謝をあらわしませんか。“私をいつも愛して下さいありがとうございます！私のためいつも祈って下さり、親切にして下さってありがとうございます！”と。

これからもいつも自分がどれほど慈しみ深い神様の哀れみと恵みによって生かされている愛の負い目を抱いている者なのか忘れないようにしましょう。自分のすべての力ではなく、いつも家族、周りの人々の助けと愛を当たり前と思わず、その愛の負い目を忘れず、身近にいる家族から、教会家族に、他の人々にも、いつまでもイエス様のように、愛と親切と哀れみの親切を尽くし、持て成し、施すことが出来るクリスチャンプレイズチャーチの全神の家族となりますように祈り致します。アーメン！

